

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	三好 弥生
最終学歴	学 位	専門分野
高知県立大学大学院人間生活学研究科 人間生活学専攻後期博士課程修了	博士 (社会福祉学)	社会福祉学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

本学における建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を教育の理念とする。

【目標】

もてる力をいかし社会貢献できる人材を育成する。この大目標の達成に向け、今年度は、各々学生が自らの強み、潜在能力を認識できるようになることを目標とする。また、次年度以降は、もてる力の活かし方を具体的に検討できるようになること、他者の利益に資する行動を選択できるようになることを目標にしたいと考える。

【方針】

自己理解が深まるような対話を通して、助言、指導する。

【計画（方法）】

演習で担当する学生一人ひとりとしっかりコミュニケーションをとり、その内面が理解できるよう対話を深める。また、社会福祉関係の講義にあたっては、自己理解に関連する知識について、各自が自分事として捉えられるよう工夫して伝える。

【担当科目】

（前期）

救急処置法、障害者福祉論、人間健康学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ

（後期）

衛生学、高齢社会論、社会福祉概論、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

総合演習では、学生との対話を心掛け、学生同士のコミュニケーションを促し、それぞれが持てる力を認識してそれを発揮できるような運営を心掛けた。また、授業は多人数の科目が多く、いくつかの科目においては授業の振り返りは主にチームズを使って行った。内容については、一方的な講義にならないよう適宜動画視聴を取り入れ理解を促した。

○作成した教科書・教材

授業資料は、基本的に毎回パワーポイントで作成した。わかりやすい資料となるよう、図表を多く取り入れたスライドを作成した。

○自己評価

総合演習は、ゼミメンバーの集団凝集性を高めることができたと考える。また、授業については、今

年度初めて担当する科目が前期 1 科目、後期 2 科目、演習が 3 科目あり、着任 2 年目であったが授業準備に追われ内容の精査にまで至らなかった。

II 研究活動

○研究課題

- A:「終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難に対する食事ケアモデルの有用性に関する研究」
- B:「重度要介護高齢者の生活支援モデルの構築に向けた研究」(研究分担者)
- C:「施設職員の『演じる行為』を涵養する研修プログラムの開発」(研究分担者)
- D:「ホームヘルパーが受けるハラスメントに関する研究」(研究協力者)

○目標・計画

【目標】

- A: 介護職員による検証を通して、食事ケアモデルの有用性や課題を明らかにする。
- B: 重度要介護高齢者の生活支援のあり方について、予備調査から本調査に繋がるキーワードを抽出し、調査内容を明確化する。
- C: 本研究課題は、令和 5 年度科研に採択された研究課題であり、今年度は研究に着手することが目標である。内容は、介護現場における対象者への対応の工夫として実践されている「演じる行為」の役割に着目し、介護職員が「演じる行為」を習得する過程や、そのために必要な支援について明らかにすることを目指したものである。
- D: 引き続きヘルパーの仕事への信念に焦点をあてて研究を進め、関連学会の発表および論文を投稿する。

【計画】

- A: 高齢者施設のコロナ感染状況をみながら、介護福祉現場における実証調査を実施する予定である。
- B: 高齢者施設のコロナ感染状況をみながら、予備調査を実施し、結果の分析などで協同する予定である。
- C: 令和 5 年度は、予備調査を経て、調査内容や調査先の選定など具体的に検討していく予定である。
- D: ヘルパーのインタビューデータの質的分析、および方法への助言など行う予定である。

○2016 年 4 月から 2024 年 3 月の研究実績 (特許等含む)

(著書)

- ・伊藤優子・久保田トミ子・三好弥生・横山孝子編集「最新・介護福祉士養成講座 9 『介護過程 第 2 版』中央法規出版 2021 年
- ・西尾敦史・大勝志津穂・尚爾華編著『人間健康学』唯学書房、2020 年 10 月

(学術論文)

- ・辻真美・三好弥生・荒川泰士・下元桂子 (2024) 「ハラスメント事例に向き合うホームヘルパーの意識や思い」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』73, 49-61.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子・荒川泰士・下元桂子 (2023) 「ホームヘルパーが体験した最もつらく深刻なハラスメントー質問紙調査からの分析ー」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』72, 59-72.
- ・Ketu Rie, Teruo Yokoi, Yayoi Miyoshi, Hiroyuki Watanabe, Toshihide Fukuda: Eating Behavior and Environments of Severe Alzheimer's Disease Patients With Loss of Language Skills :Brief Report. Gerontology & Geriatric Medicine Volume 8, 1-8, 2022.

- ・辻真美・三好弥生・岡京子（2022）「ホームヘルパーが利用者から受けているハラスメントの実態と要因に関する研究－研究の背景と今後の研究方針－」『地域ケアリング』23（7）, 57-59.
- ・Ketu Ri, Teruo Yokoi, Yayoi Miyoshi, Hiroyuki Watanabe, Toshihide Fukuda（2021）Caregivers' roles in preventing patients with severe Alzheimer's disease from becoming distracted during mealtimes: two case reports The Journal of Physical Science 33, 711-716.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子（2022）「訪問系のケアサービス従事者から受けるハラスメント発生要因に関する文献研究－ホームヘルパーと訪問看護師の比較から－」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』71, 51-66.
- ・片岡妙子・田中眞希・宮上多加子・三好弥生（2022）「介護老人福祉施設の介護職員における『演じる行為』の特徴－障害者入所施設との比較－」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』71, 67-78.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子（2021）「介護従事者が利用者から受けるハラスメントに関する文献研究－ホームヘルパーに対するハラスメントの発生要因把握の手がかりとするために－」『Humanismus』(32), 54-67.
- ・三好弥生・片岡妙子・武富純子（2021）「終末期に至る高齢者の食事摂取困難タイプ別ケアの基本と介助方法」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』70, 77-85.
- ・三好弥生・片岡妙子・浅沼高志・武富純子・杉原優子（2020）「終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難の評価－アンケート結果に基づく方法の見直し－」『年高知県立大学紀要社会福祉学部編』69, 15-24.
- ・三好弥生・片岡妙子・浅沼高志・武富純子・杉原優子（2019）「終末期に至る食事摂取困難事例の類型案」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』68, 15-24.
- ・三好弥生（2017）「介護福祉士の看取りへの前向きな意識」『介護福祉教育』22（2）, 12-19.
- ・上田恵理子・片岡妙子・三好弥生（2017）「特別支援学校の修学旅行同伴ボランティアの体験－福祉を学ぶ大学生の学び－」、『高知県立大学紀要社会福祉学部編』66, 135-143.
- ・三好弥生（2016）「要介護高齢者の誤嚥を防ぐ食事ケアに関する基礎知識」『四国公衆衛生学会雑誌』61（1）, 57-62.
(学会発表)
- ・辻真美・三好弥生・荒川泰士「ハラスメント事例に向き合うホームヘルパーのワーク・モチベーション」第29回日本介護福祉教育学会, 2024年2月.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子・荒川泰士「ホームヘルパーが受けるハラスメントについての実態報告」第30回日本介護福祉学会発表 Web 発表, 2022年10月.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子「ホームヘルプ労働におけるハラスメント発生要因に関する一考察」第26回日本在宅ケア学会 Web 発表, 2021年6月.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子・荒川泰士・小松妙・川田麻衣子「ホームヘルプサービスにおける自立支援・重度化防止にむけた取り組みへの課題－サービス提供責任者の語りからの分析－」第25回日本在宅ケア学会学術集会（高知）口頭発表, 2020年6月.
- ・辻真美・三好弥生・岡京子・荒川泰士「自立支援・重度化防止を意識したホームヘルパーの関わり－老計第10号の改正をきっかけに－」平成29年度日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック大会（岡山）口頭発表, 2020年2月.
- ・三好弥生・片岡妙子・杉原優子「終末期に至る高齢者における食事摂取困難の評価の再検討」第27回日本介護福祉学会（静岡）口頭発表, 2019年9月.
- ・三好弥生「終末期に至る高齢者の食事摂取困難タイプ別介護方法の特徴－介護職員への聞き取りから－」令和元年度日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック大会（高知）口頭発表, 2019年6月.
- ・李傑・三好弥生・横井輝夫「重度の認知症の人のケアについての一考察－メルロ・ポンティの身体

性とギブソンのアフォーダンスからー」日本認知症ケア学会大会（京都）口頭発表, 2019 年 6 月.

- ・ 三好弥生 「要介護高齢者が終末期に至る食事摂取困難の類型案」第 13 回高知県内 3 大学医工連携交流会（高知）口頭発表, 2019 年 2 月.
- ・ 片岡妙子・三好弥生 「高齢者の脆弱性を知るための用語の整理」平成 30 年度日本介護福祉教育学会（仙台）口頭発表, 2018 年 8 月.
- ・ 三好弥生 ・ 片岡妙子 ・ 浅沼高志 ・ 武富純子 ・ 杉原優子 「終末期における食事摂取困難事例類型化の試み」第 24 回日本介護福祉教育学会（東京）口頭発表, 2018 年 2 月.
- ・ 三好弥生 「介護福祉士の高齢者を看取る過程における食事をめぐる葛藤」平成 29 年度日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック大会（広島）口頭発表, 2017 年 7 月.
- ・ 上田恵理子・片岡妙子・三好弥生 「障害児と共に社会参加して得た学び」第 23 回日本介護福祉教育学会（金沢）口頭発表, 2017 年 2 月.
- ・ 三好弥生 「要介護高齢者の誤嚥予防に関する関連領域の知見の整理」平成 27 年度四国公衆衛生研究発表会（徳島）ポスター発表, 2016 年 2 月.

(特許)

なし

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・ 田中眞希・宮上多加子・片岡妙子・三好弥生・小木曾真司 科学研究費助成事業（基盤研究（C）令和 5 年度～令和 8 年度）研究課題名：「施設職員の『演じる行為』を涵養する研修プログラムの開発」（研究代表者：田中眞希）
- ・ 片岡妙子・三好弥生 科学研究費助成事業（基盤研究（C）令和 4 年度～令和 6 年度）研究課題名：「重度要介護高齢者の内在的能力に着目した生活継続のための指標に関する研究」（研究代表者：片岡妙子）
- ・ 三好弥生 科学研究費助成事業（若手研究 令和 2 年度～令和 5 年度）研究課題名：「終末期に至る要介護高齢者の食事摂取困難に対する食事ケアモデルの有用性に関する研究」（研究代表者：三好弥生）
- ・ 三好弥生 科学研究費助成事業（基盤研究（C）平成 28 年度～令和 1 年度）研究課題名：「介護者による高齢者の看取り期食事ケアモデル構築に向けた実証的研究」（研究代表者：三好弥生）

○所属学会

日本社会福祉学会

日本介護福祉学会

日本介護福祉教育学会

日本サルコペニアフレイル学会

○自己評価

A: 新型コロナウイルス感染症は、2023 年 5 月に「5 類感染症」となったが、重度要介護高齢者への感染リスクは変わりなく、厳重な対策が継続される状況にある。そのため、個人の科研費助成研究は、今年度も実施できなかった。

B: 今年度は、この研究に関与することがなかった。

C: 予備調査（インタビュー）の質的分析について助言を行った。

D: ヘルパーが利用者から受けるハラスメントの共同研究は、他大学の紀要に掲載され、学会でも発

表することができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

教務委員会及びFD・SD委員会、学部ワーキングでは中退防止を担当することとなった。いずれも初めて担当するものであるため、今年度は職務内容を理解し、適切に役割を担えるようになることを目標とする。

【計画】

委員長や他の構成員と積極的に関わり、運営に参加する。

○学内委員等

教務委員会、FD・SD委員会

○自己評価

教務委員会、FD・SD委員会いずれも初めて所属する委員会であったため、まずは業務内容を知ることが必要であった。しかし、教務委員会の業務は多岐にわたり、規定も多く複雑で、教務課職員などに確認することがしばしばで、十分業務を理解できるまでに至らなかった。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

これまでの研究で得られた知見を様々な形で公表し、社会貢献に努める。

【計画】

学会での発表や学会誌への論文投稿を通して研究成果を公表する。

○学会活動等

なし

○地域連携・社会貢献等

なし

○自己評価

共同研究ではあるが、研究成果を紀要掲載や学会発表として公表することができた。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

なし

Ⅵ 総括

着任して2年目、ようやく愛知東邦大学での業務に馴染むことができつつあるように感じる。何より、学生と少しずつ関係が築けるようになってきた。しかし一方で、研究に割く時間があまりとれなかった。次年度は時間配分を検討したい。

以 上